

通学合宿「うずしお交遊塾」(高校生リーダー・大学生ボランティア編) 実施報告

1 趣旨 今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、家庭での親子のふれあう機会の減少、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。これからの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をするを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。また、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、地域の安全・防災について主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。

2 主催 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家

3 日時 平成29年1月25日(水)～28日(土) 3泊4日
※高校生リーダーと大学生ボランティアは前泊して研修を実施

4 場所 国立淡路青少年交流の家

5 対象 南あわじ市立南淡中学校区小学3～6年生
南あわじ市立南淡中学校1・2年生
兵庫県立淡路三原高等学校生及び吉備国際大学生(高校生リーダー、大学生ボランティアとして)

6 参加者 19名(小学生13名、高校生3名、大学生3名)

7 内容等

平成28年度 国立淡路青少年交流の家 通学合宿
淡路 交流の家
うずしお交遊塾 KOYUJUKU
ボランティアリーダー募集!

平成29年 1月25日(水)～28日(土) 3泊4日

開催所 国立淡路青少年交流の家
募集 高校生リーダー10名程度(先着順)
参加費 保険代2000円(合宿期間中の食事は主催者で負担します。)
持ち物 宿泊用具(3泊4日)、授業準備(26-27日の分) 防寒具等

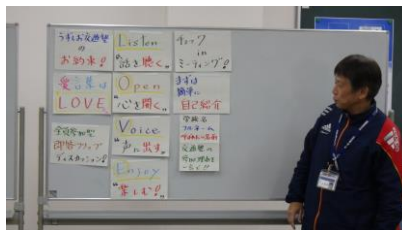
一緒に遊び、学ぼうよ!

1月25日(水) 14:00-18:00 18:00-21:00
1月26日(木) 14:00-18:00 18:00-21:00
1月27日(金) 14:00-18:00 18:00-21:00
1月28日(土) 14:00-18:00 18:00-21:00

お問い合わせ先
国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
(担当: 福越、山本、平本)
TEL: 0799-55-2096
FAX: 0799-55-0463
E-mail: kougaku@nsempo.or.jp
HP: http://www.rkyu.go.jp

① 前日研修

セッション1では、「ボランティアとは何か?」について、ワークショップ形式で進めた。参加者からは、「人のためによりことをすること」「人の役に立つこと。そして、自分も成長すること」等の意見が出された。今回は、リーダー的な役割を求められており、「今まで学んだことや経験したことを伝えてつなぐ」「誰からもが憧れられる存在になる」という意識をもつことができ、明日からの活動への意欲を高めることができた。セッション2では、「アイスブレイクとは何か?」について、職員と大学生ボランティアから「アイスブレイク」の内容を提案し、進め方と役割分担を行った。高校生リーダーは、「アイスブレイク」の進行役を担うのが初めてであり、また、大学生ボランティアにとっても「アイスブレイク」の進行が得意でないという意見があったが、「集まってくる参加者の不安な気持ちを取り除いて、仲間と打ち解けて楽しい雰囲気になりたい!」という意見でまとまり、高校生リーダー・大学生ボランティアともに思いを共有できるよい機会となった。



② 1日目(開塾式・活動Ⅰ:みんなで仲良くなるう!)

参加者のほとんどが地元のミニバスケットボールチームに所属しており、顔見知りの参加者がほとんどだった。緊張状態というより、「社会体育のチーム合宿」のような空気感で、気持ちが高揚している状態の参加者が多かった。

開塾式では、所長より今回の「うずしお交遊塾」での心構えについて話があった。引き続き行われた「活動Ⅰ:みんなで仲良くなるう! (アイスブレイク)」では、高校生リーダーの司会のもと、「ネームトス」「ラインナップ」「UFO」の3つの活動が実施された。楽しいひとときとなり、小学生からは「楽しかった。」「また、学校でもやってみたい。」という意見もあった。

就寝後の「リーダー・ボランティアミーティング」では、「アイスブレイクがうまくいった。仲良くなれたのは良かった。」「アイスブレイクで十分に説明ができなかった。」と成果と課題を挙げた。小学生とのかかわり方についても、「注意をしようかどうか迷っている。」「(体調を配慮して)就寝時刻より早く寝させたい子がいる。」「ライン(SNS)の使い方が気になる。」等の意見が出された。所長からのアドバイスもあり、「規範作りをしっかりとすること」「子どもたちとの丁寧なかかわり方」について共有することができた。



エピソード1 (通学合宿ならでは!)

参加者は、マイクロバスや公用車で、それぞれの学校に登校していった。高校生リーダーと大学生ボランティアが公用車に同乗し、小学生を学校まで見送った。その後、残っていた大学生ボランティアと職員でこれまでに外出している課題について、修正できることがないか話し合う機会をもった。「宿題は必ず仕上げる。」「11時以降は静かにする。」「女子は決められた部屋で寝る。」等、守るべきことを徹底して守らせるというスタンスで小学生と関わるようコミュニケーションの取り方について共通理解を図ることができた。夕方になり、交流の家に帰ってきた小学生は、事務所に「ただいま!」と元気のいい声で挨拶に来た。職員からも、「お帰り!」と温かく声を掛ける場面があり、家庭的な雰囲気でもとてもほほえましく感じた。小学生も一度にたくさんの家族が増えたようで、うれしそうだった。宿題を済ませた後、トランプで遊んだり、細長い風船で動物や花を作って楽しんだりと、既存の友だち関係以外の子と関わる場面も見られた。

③ 2日目(活動Ⅱ:楽しみながら防災について学ぼう!)

活動Ⅱ「楽しみながら防災について学ぼう!」では、兵庫県教育委員会事務局義務教育課 副課長兼初等・中学校教育班長 近都 勝豊 氏を講師に迎え、地域の安全・防災について自分にできること、準備できることについて考える機会をもった。サウンドゲームや伝言ゲーム、「ライトでSOSを送って助けを呼ぼう」等、ゲームを通して体を動かしたり、気圧についての実験をしたりして、防災について楽しく学ぶことができた。「ライトでSOSを送って助けを呼ぼう」では、SOSのモールス信号をライトで点滅させて相手に伝える方法を学んだ。楽しい活動の中にも、「自分の命は自分で守る」ことを体験しながら学ぶことができた。最後に近都氏から、「いつか起こる災害を恐れているだけでなく、しっかり準備をして、希望をもって生活してください。」というメッセージをいただき、いざという時のための準備(物資、必要な判断力や行動力等)の大切さについて学ぶことができた。



④ 3日目(活動Ⅲ:防災クエストに挑戦!)

「防災クエスト」は、実際に町中を歩いて海拔を記載している看板を見つけたり、防災に関する様々なクイズやミッションを解決したりしながら、総合得点を競うオリエンテーリング型の活動である。約束事を守りながらグループで協力して活動する内容が求められる活動であり、高校生リーダーにとっても班をまとめ、リーダーシップを発揮するよい機会となった。大学生ボランティアは、「約束事が徹底されているかどうか」「班活動がうまくいっているか」「安全面の配慮ができていないか」等、小学生や高校生リーダーを見守るという役割を担って活動に参加した。「津波が起こって20分以内に高台に避難する」「車椅子の人がいます。あなたはどのようにするか」という合同のミッションでは、班のみんなで協力して車椅子を運んだり、声を掛け合ったりしながら規定時間内に課題を解決する様子が見られた。防災クエストのふりかえりでは、「家に帰ってからの私の防災計画」について、決意表明を行った。「地元の避難所や高台を確認します。」「災害が起こった時の家族の合流場所を話し合って決めます。」等、自分たちの地域や家庭で何ができるかについて考えを深めることができた。「私の住んでいる近所では、お年寄りが多く住んでいるので、お年寄りと(日頃から)よくしゃべるようにしておきたいです。」「地域のために自分に何ができるのか」自分と地域の人々とのかかわりの大切さに気づくことができた参加者もいたことに、この二日間の防災に関する活動の意義深さを改めて感じる事ができた。



また、帰っておいで!



閉塾式では、事業に携わった職員からの手紙が読み上げられた。「うずしお交遊塾に参加した子どもたちへ。さようならのおわかれのあいさつができなくてごめんなさい。みんながたごい！と言って帰ってきてくれた時、とてもうれしかったです。また、たごい！と言って交流の家のいろんな事業に参加してください。また、会える日を楽しみにしています。」この手紙を聞きながら、別々の所から集まった参加者でありながらも、ひとつ屋根の下で活動・生活を共にした「家族」だったんだなと感じることができた。「2泊3日じゃなくて、もっとあったらいいのになと思いました。」というアンケートの記述にもあるように、高校生リーダーや大学生ボランティア、友だちとともに過ごした3日間がどれだけ楽しく、そして充実したものだったかをうかがい知ることができた。

⑤ 事後のふりかえり(高校生リーダーと大学生ボランティア)

高校生リーダーからは、「3泊4日は長く、ストレスと疲労がたまった。」という意見がまず出てきた。また、「大学生ボランティアの方々がいてくださって本当に助かりました。」という意見もあった。今回初めて交流の家の事業に参加した高校生リーダーにとっては精神的にも肉体的にもかなりきつかったと思う。ただ、小学生と積極的に関わっていきこうという意欲的な姿勢を示した。そんな姿を見ていた大学生ボランティアは、何とか高校生リーダーをフォローしようと積極的に子どもたちとかかわり、時には高校生リーダーにアドバイスをしていた。これまでに培った経験を生かし、高校生リーダーを温かく見守りながらしっかりと支えている姿にたくましさを感じた。高校生リーダーは模試の期間であったこと、大学生ボランティアは学年終盤の授業であったことで帰りが遅くなり、小学生と関われる時間が短かったことも残念だったという意見が出た。

エピソード2 (活発に意見交換!リーダー・ボランティアミーティング)

就寝後の「リーダー・ボランティアミーティング」では、小学生の生活の様子で気になることが話題の中心となった。「スマホばかり触っているのが気になる。」「男女がはっきりと分かれて活動している。」等、意見が挙げられた。午前中に行った改善点と合わせて、「約束事をしっかり守らせること」「班(活動)を意識させること」について共通理解を図ることができた。また、大学生ボランティアから欠席者がでたことによる班での男女の人数の偏りについて意見が出され、メンバーの編成についても話し合わせ、構成メンバーの変更を行った。効果的に運営するための方策についての意見も出る活発なミーティングであった。次の日に早速実行!「班(活動)を意識させる」ために、朝食を班で食べることになった。照れくさそうにしている小学生もいたが、いつもと違った雰囲気の中で過ごし、班の仲間を意識するよい機会となった。班の構成メンバーが変わったので、活動Ⅲの前にアイスブレイク「フープリレー」を実施した。「男女と交互に並ぶ」「できたタイムをグループごとに設定させる」等のねらいをはっきりさせて活動することにより、新しいメンバー同士がうち解けたことはもちろん、このグループで頑張ろうといった仲間意識が芽生えた有意義な時間となった。

8 参加者の声

<小学生の感想> (事後アンケートより抜粋)

- 友だちができて、みんなであそんで楽しかった。
- みんなが協力することは大切だなあと感じた。
- みんなと生活することで、いろんなことに気づいた。楽しかったから、来て良かったと思います。
- 友だちと楽しみながら防災についていろいろ知れたのでよかったです。2泊3日じゃなくてもっとあったらいいのになと思いました。
- 親に「行ってこい。」と言われて来たけど、すごくいいことが学べて、来て良かったなと思いました。
- 楽しいことをしながら学べてよかった。通学合宿が面白かった。
- 備え(準備)は大切なんだなと思いました。

<高校生リーダー・大学生ボランティアの感想> (事後アンケートより抜粋)

- アイスブレイクにより交流が深められたので、とてもよかったです。
- 今回初めて参加させていただいて、4日間本当に充実していました。ボランティアと聞くと、堅苦しいイメージがありましたが、そうではなく楽しい思い出がたくさんできました。次も是非参加させていただきたいです。
- 子どもたちのスマホを触る場面が多かったのが気になった。
- 子どもたちがすごく元気でいい子たちだったので、3日間とても楽しかったです。

9 成果と課題

【アンケート調査票から】

事業の総合評価では、「満足」「やや満足」と回答した小学生は100%、高校生リーダー・大学生ボランティアも100%という結果から、概ね活動内容に満足していると考えられる。満足度に「3」をつけた参加者の意見は、事前に配布されたチラシと日程に違いがあったこと(お風呂が活動後になったこと)が挙げられており、予定の変更については確実に参加者に伝えるよう今後配慮していきたい。

【通学型の合宿だからこそ見えるもの】

通学型の合宿は、昼間は学校で活動し、夕方交流の家に帰って来るといった特徴があり、子どもたちにとっては、「家」を感じられたのではないと思う。「ただいま！」と事務室の職員に元気な声で挨拶する子どもたちの姿や「お帰り！」とあたたかく迎える職員の姿がとても印象に残った。学校から交流の家に帰って来てまずは宿題を仕上げ、その後の夕食まで自由な時間を過ごすということで、子どもたちの生活や習慣が垣間見えた。「スマホを触る場面が多かった」というボランティアの感想にもあるように、生活面で気になることもいくつか見受けられ、教育施設として何ができるのか、どこまで支援できるのかということも今後の課題として取り組んでいきたい。

【防災プログラムの活用】

◆「防災」への意識を高める体験活動

今回は、「防災」を切り口にした事業でもあった。ゲームを通じて、実際に体を動かしたり、楽しい実験をしたりしながら、緊急時の判断力や行動力の大切さについて学ぶことができた。また、当所の「防災プログラム」を活用し、実際のフィールドを活用しながら同じ班のメンバーと協力して様々な課題に熱心に取り組んでいる姿から、防災に対する意識の高まりを感じ取ることができた。それぞれの立場で「今、何に取り組まなくてはいけないのか」について深く考えるきっかけになった活動であった。

【望ましい人間関係の育成】

◆異年齢集団での活動を通して

今回の事業では、主に高校生リーダーが小学生をサポートする役割を担い、大学生ボランティアが全体をサポートするという形で活動していた。高校生リーダーは、交流の家の事業に初めて参加する人もいて不安はあったと思うが、実際に小学生と活動を共にしながら、コミュニケーションの難しさやボランティアとしてのやりがいを感じ取っていた。ボランティア個々の課題も見つかったようで、今後の活動につながる事業になったのではないかと感じた。また、小学生と高校生リーダー、大学生ボランティアの「異年齢集団としてのかかわり方」についても学びの多い機会となった。自由な活動になると、既存の集団での活動に偏ることが多くなるので、高校生や大学生が間に入ることでその関係性を崩すきっかけを作り、みんなを巻き込める活動を意図的に仕組みながら「新しいつながり」を創っていくことが今後の課題として挙げられる。趣旨にもある「異年齢の青少年が集って共同生活をすることを通して、望ましい人間関係の育成や自立の精神を養う」ためにも、「かかわる時間の増加」と「ねらいに合った活動」について検討する必要がある。中1ギャップ解消プログラム事業として、更に実用性のあるプログラム内容となるよう改善していきたい。

